

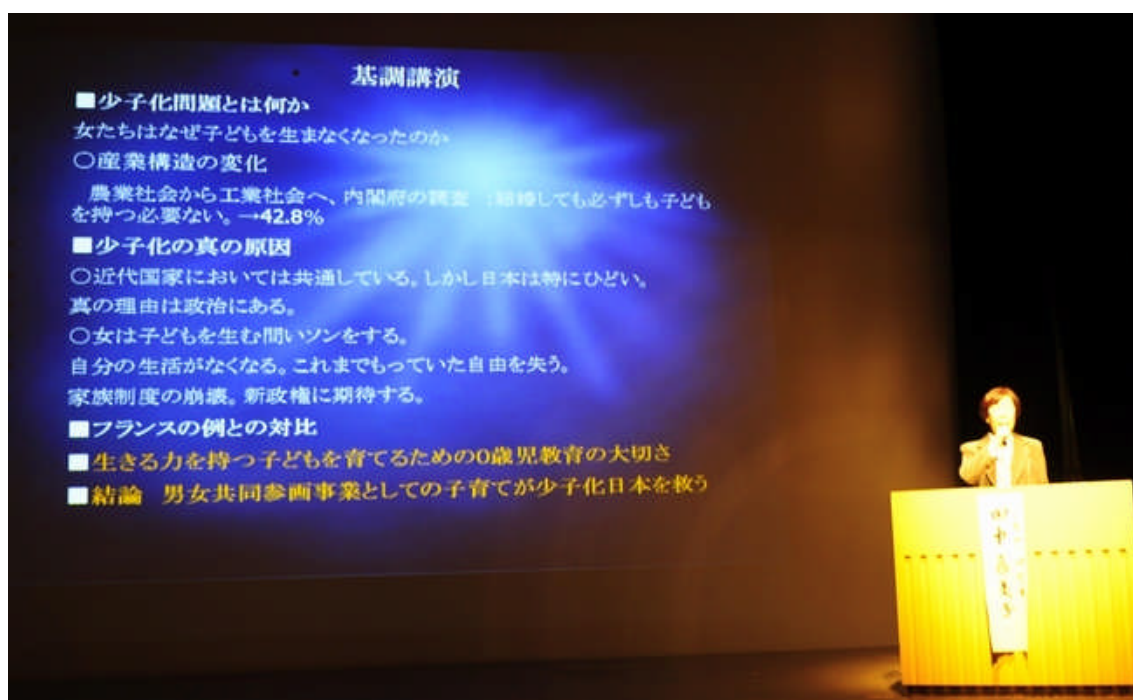
第8回世田谷フォーラム

基調講演

少子化・子育て対策 待ったなし

ー女たちはなぜ子どもを生まなくなったのかー

田中喜美子



田中喜美子さん（09年12月10日 下北沢タウンホール）

ただ今、ご紹介いただきました田中喜美子です。少子化については、最近たくさん議論が出て来ておりますが、とにかく子どもがどんどん減っていくんじゃないということで、色々な論者が言っているんですけども、私の見ている少子化の現実と、普通の学者たちがおっしゃっていることは、だいぶ違うんじゃないかと思います。

と申しますのは、さっきもご紹介いただきましたけれども、主婦の投稿誌「ワイフ」を30年やっておりまして、それをつい2年前に後進に引き継ぎまして、今は「ファン・ポリティク」（政治ミニコミ誌 フランス語：「Femme Politique」は日本語で「政治的女性」の意）一点張りでやっておりますけれども、女性の現実について、男性の方たちが、特に政府筋の方たちが、おっしゃることは、本当の意味での現実とずれているのではないかと、

いう風に思います。それで「少子化」と言いますと、もう女は子どもなんかいないんだというような意見も、ついこないだまで出ておりましたが、日本経済新聞の中に、内閣府の調査が載って、「結婚しても必ずしも子どもを持つ必要はない」という人が、42.8%いるということが取り上げられておまして、それに対しては割合バランスの取れた意見を新聞社の方は書いてはいらしゃったんですね。

それではどうして女が子どもを産まないのか、ということの現実というか真相というか、核心的なことについて、皆さん分かってはいらっしゃらないような気がいたします。それで私は投稿誌「ワイフ」をやってきました中から、「ファム・ポリティク」をやってきた中から把握してものを、ここで皆さんにお伝えしたいと思います。

1. 女性が子どもを産むとひどい目に遭う時代

少子化というのは、農業社会から工業社会に移行する時に、必ずどんな国にも起こって参ります。これは日本だけではなく、それこそイギリスでもフランスでも、アメリカでも、アメリカは比較的そうではないんですけど、ヨーロッパでも起こったことで、だから日本も少子化になるのは、当然のことであるというような考え方もなくはないわけです。しかし日本の少子化というのは、非常に違う部分があって、それだからこそ、一所懸命てこ入れをしてもなかなか（子どもが）増えないだろうと、というのが私の見通しなのです。そのどこが違うのかということ、ここで皆さまに、お伝えしてみたいと思うんですね。

どういうことかと申しますと、一口で言いますと、この国で女が子どもを産みますと、大変ひどい表現ですけども、「ひどい目に遭うのです」、本当に、女が子どもを生むとひどい目に遭うのです。でみんなそれを口に出してはおりません。「私は子どもを産んでひどい目に遭った」なんて言うのは、感じの悪い言い方ですよ。ですからなかなか、それをはっきり言おうとする方は少ない。だけれども、それはもう30年前からあった現実なんです。じゃ一何で女が子どもを産むとひどい目に遭うのか、ということですが、まず普通の場合ですと、職業を失います。ついこの間、新聞に出ておりましたけれども、大体70%の人が離職するという現実があります。そして次に収入を失う。職業を失い、収入を失う。それからですね。自由を失うんです。

この中にお子さんをお育てになって職業を失われた方、そしておばあちゃんもいない、親戚もないというということで、一人で子育てを抱え込まなければならない方はどのくらいいらっしゃるかは分からないのですが、行政のサポートも、非常に少ない。今は少し違ってはきましたが、30年前20年前、いや10年前ですら、行政のサポートは少ない。本当に女性が子どもを産んだ時には子ども（中心）になっちゃうんですね。でそういう中で、一人産んだら、もうこれ以上、産めないよねっていう現実がございます。

これ以上産めない。ということで、次の子を産みたいと思わないんですね。でその上でですね、日本の特殊性というのは、ここは私が1997年から「ニューマザーリングシステム」というのをやっております、子育てで本当に行き詰まって、大変な思いをしていらっしゃる方に、子育てサポートをしているわけです。

その中で、自分の状況は、こんなだ、というのを手紙で書いてきてくださる。それを拝見して、あなたの場合は、このところをこのようにすれば、いいですよ、というように、ひとつひとつ個別に、お手紙のやり取りの中で子育てのアドバイスをさせていただく、というのが私たちのしている仕事なのです。

その中で、つくづく痛感させられたのは、「女はなんて孤独なのだろう。」、「何で女の人是一人で悪戦苦闘しているのだろう。」ということと、同時に「何て間違った子育てをしているのだろう。」、しかもその子育てがいいのだと、そういう間違った子育てをすることがいいのだと、いう風に教え込まれて、それにのめり込んで、挙げ句の果てに、子どもがどうにもなくなくなって、2歳ぐらいになってから、私のところに、意見を求めていらっしゃる方が多いわけなのです。

2. 間違った子育て＝「母子の過密着」をNHKまでも推奨

それでついこの間、夜の9時、ゴールデンアワーにNHKが放映したのが、おばあちゃんの子育てを否定する番組でした。私は実際見なかったのですが、私のところで仕事をしていている働き盛りの女性がふたりとも、凄く怒って、「あれを見てたら、きっと田中さんかんかんだよ」って言って、昨日ふたりからその話を聞いたんですね。どういう内容かというと、「子どもは抱き癖がつくから、子どもはあんまり抱かない方がいいよ」っていうおばあちゃんの知恵、これが間違っているというんです。

赤ちゃんのうちから、泣いたらすぐに抱き上げて、ハイハイといって、するのがいいんだ、これがいい子育て、子どもの精神を安定させる子育てなんだといういうことが、そこで大きくクローズアップされた。おばあちゃんの抱き癖そんなのは、全然きにすることはない。これがその番組の主たるテーマだったわけです。でこれはみなさんどう思いになるでしょうか。お子さんを実際自分の手でお育てになってそういう形で赤ちゃんの時から、泣いたら抱っこ、泣いたらオッパイ、という形で育てると、子どもはどうなる。その番組では、オッパイもいつまでやってもいい。子どもがいらないって言うまでやってもいい。それも出ていたそうです。そういわれて、いつまでも、オッパイを離さないでしゃぶらせる3歳まで飲んでいたというお子さんもあるんですね

こういう形の母子密着によって、子どもの欲求は、どこまでも尊重し、満たしてやればいいという子育ての仕方が、流行ってきたのが、今から30年前、20年前です。80年代から凄い増えてきたわけなんです。私はこの歴史なんかも、かなり調査しましたのでわかりますけれども、その結果いったい、80年代赤ちゃんの時に、そういう形で、どんな欲望でも満たされてきた子どもたちのなれの果ては、いったいどうなるか。それこそ年表を作って、相関関係を考えて見ればよく分かると思いますけれども、その中で、どういう少年、どういう青年が出てきたか。

3. 引きこもり百万人は間違った子育てが元凶!?

この間、毎日新聞で、心理学者の香山リカさんも書いておられましたが、引きこもりが100万人の件です。日本には百万人の引きこもりの子どもたちがいるのです。ちょっと嫌なことがあると、人の中に出て行かれない。これは学校時代から始まっているわけですね。不登校という形で、これが出てくると、最近小学生までこの不登校が下がってきました。小学二、三年から、そのような形になってしまう。一年から始めることもあります。そういうように自分の思い通りにならなかったら、もう出ていくのが、イヤになってしまう。

これは、諸外国にもあるわけですが、例えばアメリカだと、非常に暴力的な社会ですから、暴力の方に行くわけですね。ところが日本人は、おとなしいですから、相手に向かっていくでなくて、イヤになったら、引きこもってしまう。で引きこもり100万人なんですね。そういう形の病的現象が、今の日本には、引きこもりだけではなくて、さまざまな場所で蔓延っています。そういう病的現象の一番根源にあって、種を蒔いているのが、子育ての問題ではないかと思っています。

そこで、私が発見しましたことは、私と同じように、乳幼児の子育て時期が大事なのだよと言っていらっしゃる方は、いっぱいいるのです。乳幼児の心理学をやっていらっしゃる方たちは必ず、そういうように、おっしゃるんですけど、そのおしゃっている内容は、子どもに欲求不満を起こさせてはいけない、できるだけ、子どもの欲求は満足してやりましょう、と言っています。そうでない方は、私は今まで160冊の育児を読んで、ひとつひとつ検証してきましたが、私と同じ論を言っていらっしゃる方は、お一人しかいらっしゃいません。

4. 0歳児の子育てこそ大事

これは岡山大学の元外科部長をしていらした國米欣明（こくまいよしあき）という先生なのですね。でその方が、三一書房からお出しになっている「その子育て科学的に間違えています」という本です。その本を取り寄せて、又同じようなこと書いてあるんだろう、

と思いながら読みましたら、これが嬉しいことに私と同じ主張でした。

子どもは甘やかしてはいけない。幼児の時に甘やかすと、後で大変なことになる、まあそういう論調です。ところが、この國米さんのお書きになったもの、私も嬉しくてお手紙を書きまして、今文通もしているんですが、國米さんの主張も0歳の時の子育てが書いていないんですよ。それで私が発見したことは、0歳の甘やかしこそ、子育てをだめにする元凶だということなんです。

0歳の大切さというのは、おっしゃっている方時々あります。何と言っても、何と言ってももの凄く脳細胞が柔らかい時、生まれてはじめて、世の中と向き合う赤ちゃん、その柔らかい脳細胞の中に刷り込まれるので、0歳は大切なんです。ということはみなさん、ちょっとお考えになればお分かりだと思いますよね。それで0歳は大事だと言ってくださる方が、赤ちゃんの欲求はすべて満たしてやりましょう。泣いたら抱き上げてやりましょう。オッパイを飲みたいと言えばいつまでも飲ましてやりましょう。これは最近時間も構わず、やりましょうという風になりました。

前は、私どもが子どもを育てる時は、3時間置きとか、モノによって違うのですが、最初は4時間置き、それが段々3時間置き、2時間置き、と段々甘やかし方向にいつているのですけれども、とにかく時間を置いて、オッパイやりましょうということでした。ところが今や、どんな時でも、赤ちゃんが要求すれば、オッパイいつでもやりましょうという形で欲求満足が、すべての根源になって、しつけなんてない、子どもの欲求満足させるということが子育ての根源であるというような論が今蔓延っております。

で、これは変だというのは、人間の欲望を満足させるのがいいという、基本的な姿勢で子育てせよ、教育にせよ、それから大人の問題も、まあ資本主義というのは、そういう（欲望を満たす）というものの上に行われている主義ですから、これがある程度、わかることなのですから、それを子育てに応用すると、どうなるか。

5. 本は売れても母子過密着を否定する子育て論が一般化しない？！

0歳が終わって、満一歳になる頃に、はっきり出て参ります。私は今まで、97年から発足して09年まで、一人一人のお母さんに個別のアドバイスをして、12年間で約800のケースがたまりました。その間に色々な本を書いているんですが、子育て関係で書いている本は約20冊ございます。どれも有り難いことに非常に、売れているんですね。40刷り、50刷り、という本もございます。ところがですね、これだけ売れていて、本をお読みになったお母さまから感謝の手紙を続々来るんですけど、全然それが一般化しないんです。というのは多勢に無勢。そういう主旨の本をやっている人は、日本で私と國米さ

んの二人だけなんです。であと100人以上いらっしゃる先生方はみんな子どもの欲求はすべて満足させろ、という形ですから、これは100分の2では敵うはずもなく、本が売れているのは嬉しいんですが、一般に浸透しないんです。

6. 子どもの欲求を聞き過ぎると泣く子ができる！！

せいぜい一昨日のNHKでは、子どもが泣いたら、必ず抱き上げてやりましょうと言って、おばあちゃんが側で抱き癖がつくからダメよ」と言っても、「そのおばあちゃん間違っている」と言って、その方向でばっちり放映しているわけです。NHKの電波は大変な影響力です。で私は何故NHKが、そのような主旨の子育ての考えを真に受けて放送をしたのかということ、NHKに行って聞いてみたいと思っているんですね。現場で電波を握っている人というのは、必ずしもNHKの正社員ではなくて、下請けかも知れない。で色んなところで色んなものが飛び交っていて、その中の主流は、子どもの欲求はすべて満足してやりなさい。そういう形で育てられた子がどうなるかということ、非常に泣く子になります。

泣く子というのは、自分の思うとおりにならないと泣く子になります。それはそうなんですね。もう脳細胞が柔らかい時に、全部思い通りにならない時に泣くわけですから。するとお母さんは、それに振り回されるわけですが、これはやってやらないといけない、と子どもに欲求不満を起こさせてはいけないんだと、こういう風にお思いになるわけなんです。そうすると、抱っこするのが、常態になるわけです。そういう記録が私のところにいっぱい来ております。それで、下に置くことができないくらい抱き癖がついて、1歳くらいの時には、片手で子ども抱いて、フライパンを振っていました、というお母さんもいました。これは非常に危険です。火の側ですしね。油が弾けたりします。でもそういう風にしないと子どもが泣きわめくわけなんです。だから離せないんですね。

7. 子育ての難しさが少子化を加速させている

まあ、色々な相談がありますけれども、足にまつわり付いてくるから、台所に立つこともできませんと言うのもありました。でそんな時の私たちのアドバイスは、柵を作ってヨチヨチ歩きの赤ちゃんを、その柵の外に置きましょう。その時に、泣いてもしようがないから、「お母さん料理しているから、待っててね」と言って泣かせておいてください。その代わり、すっかりお料理が済んで手が放れたら、子どものところへ行って「お待たせ、料理できたよ」といって、子どもねぎらってあげて、その時に抱っこしてあげましょう。そういうアドバイスをしています。だけど、それさえもできないわけで、いつも、抱っこをしている。

こういう子育て、本当に辛いですね。ですから、日本の少子化の非常に大きな原因のひとつは、子育てのやり方が分からない、然るべき子育てのやり方が分からない、できる

だけ手を掛け、時間を掛け、お母さんの体力を消耗させる形で子育てがあるから、もうこんなに子育てというものが、辛いものだったら、二人目なんかいないよ、それに聞き分けがない、3歳ぐらいまでにだっ子になっていますから。もう一人で閉口閉口とはっきりに言わないにしても、そういう気持ちが（女性の側）にありますから、二人目を産んで育てる気持ちなんて、なくなってしまう。これが今の現実なわけです。

私はこれを見ると、何か胸が痛くなってしまうのですが、そういう子育てをお母さんたちに仕込んで、それで悠然としていて、それがいいのだとしてらっしゃる所謂カッコ付きの先生たちが、たくさんいらっしゃる。それも先生方の罪ではなくて、この日本という国は文化的に特殊な国なのですね。

8. 政権交代を好機として抜本的な「子育て・少子化対策」を

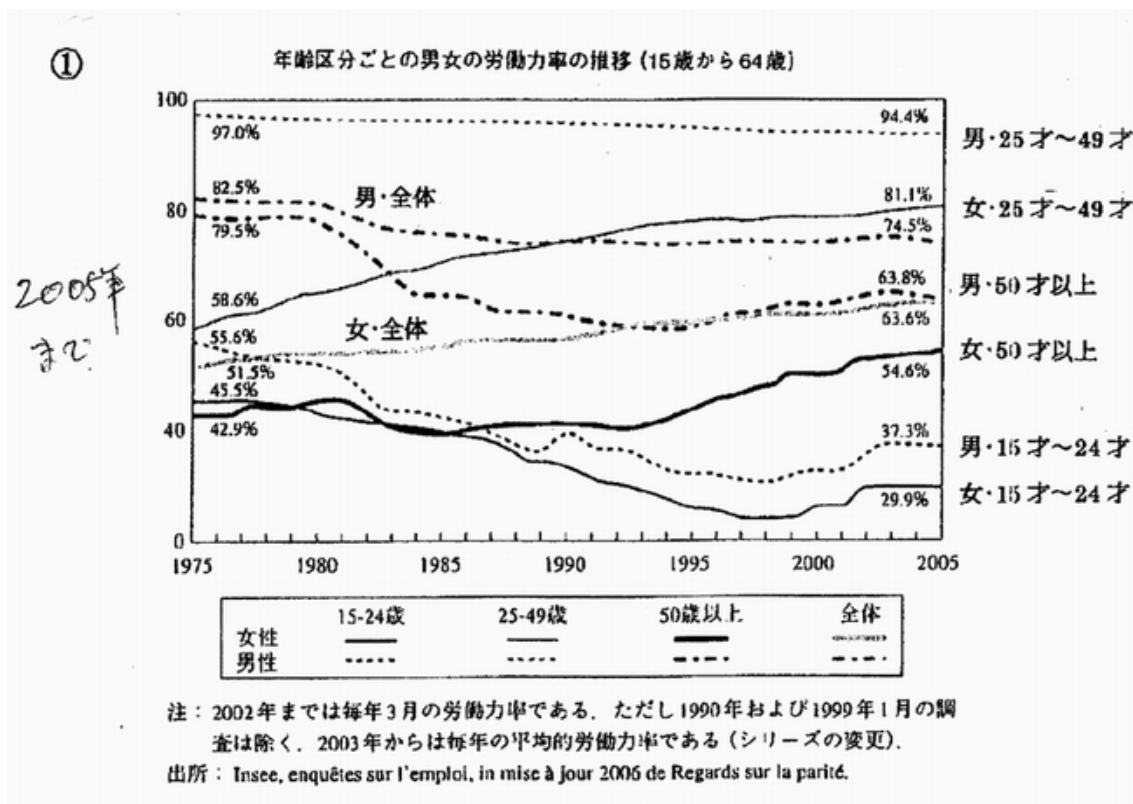
私は、フランス文学の出身なものですから、どちらかというと、フランス文化を割合知っているのですが、フランスの子育て、日本の子育て、フランス人の気質、日本人の気質を比べてみたら、同一に論じられないくらいの差があります。これは皆さんも当然ご存じのことですが、フランスは革命をした国です。日本は革命にはほど遠い、明治維新はあれは本当の革命ではないわけですね。それから戦後も、革命ではなくて、ただ戦争に負けた。それで戦前の人が同じように居座った、ということなんですね。それで本当の革命というと、変な言葉ですけども、本当の意味で日本人が変わったのは、今度の政変で自民党から民主党へ変化しているという事じゃないかと私は思います。

これも私はこの次の「ファム・ポリティク」でしっかりそのところだけは、書かせていただきたいと思いますが、これは何も、民主党が偉くて、民主党の然るべきやり方が、功を奏して、変化が起きたのではなくて、構造的な形で、日本人のメンタリティ、それが戦後64年、戦前風の昔ながらの、人間関係の中で作り出された政治のスタイルそれが、とうとう近代化され、ついに本当の意味の近代化の曙が、今2000年最初の10年が終わる頃になって、それがようやく始まったのだと、そういう風に私は考えています。これからようやく近代化が始まり、本当の意味での日本人の近代化の曙の第一歩が今始まったのだと、私は思っているわけなのです。

9. フランスの少子化対策に学ぶ

それでこの子育ての変革というのも、それと軌を一にして始まると思います。でこれは大状況の中で、女は子どもを産むと損をしてきた。女が個人として子どもを育てる仕組みというのが、とにかく日本というのは、そういう田舎社会ですから、女が一人で育てていくシステムというのは、行政の方に、我々人民の方にも問題があって、一から作って行くしかないのですね。じゃーその中でフランスのやり方、あるいはアメリカのやり方、アメ

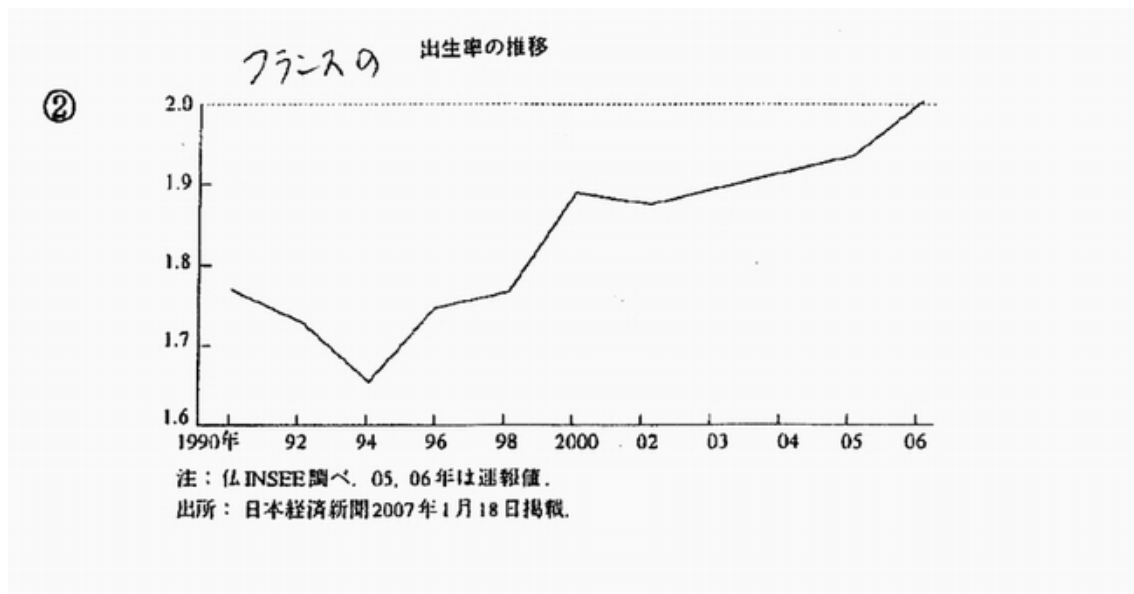
リカのやり方は、あんまり役にたちません。やはりフランスはとてもいいと思います。まあスウェーデンとか北欧もとてもいいです。同じヨーロッパの中心部でもドイツはあんまり役にたちません。というのは皆さんご存じのように、ドイツは3割の結婚をした女性が、子どもを持っておりません。ドイツのことは細かく研究しているわけではないので、はっきりと言えませんが、3割もの女性が、子どもを持たないというのは、どっかやり方が非常に間違っていると思いますね。フランスは一割です。子どもを持ってない女性です。だけれども、大体10分の1のカップルに子どもはいませんが、自然の不妊というか、子どもが産まれないカップルというのはあるわけです。一割がいないというのは、自然なことなのです。



子育て情報を基本的に考える時に、まずこの第一のグラフを見てください。1975年から2005年までの、フランスにおける15歳から64歳までの年齢区分別の男女の労働力率の推移のグラフです。フランスでは、女は以前より多くの方が働いているという統計でございます。より多くの女が働きに出て、より多くの男が働かなくなったことが分かります。

次に第二のグラフは各国別の女性の年齢別労働力率の国際比較のグラフです。真ん中の太い線が日本です。で日本は、30歳から34歳の付近が窪んでおります。これは当然のことなんですけど、子育て期は仕事を捨てて家庭に入って子育てに専念しているんです。

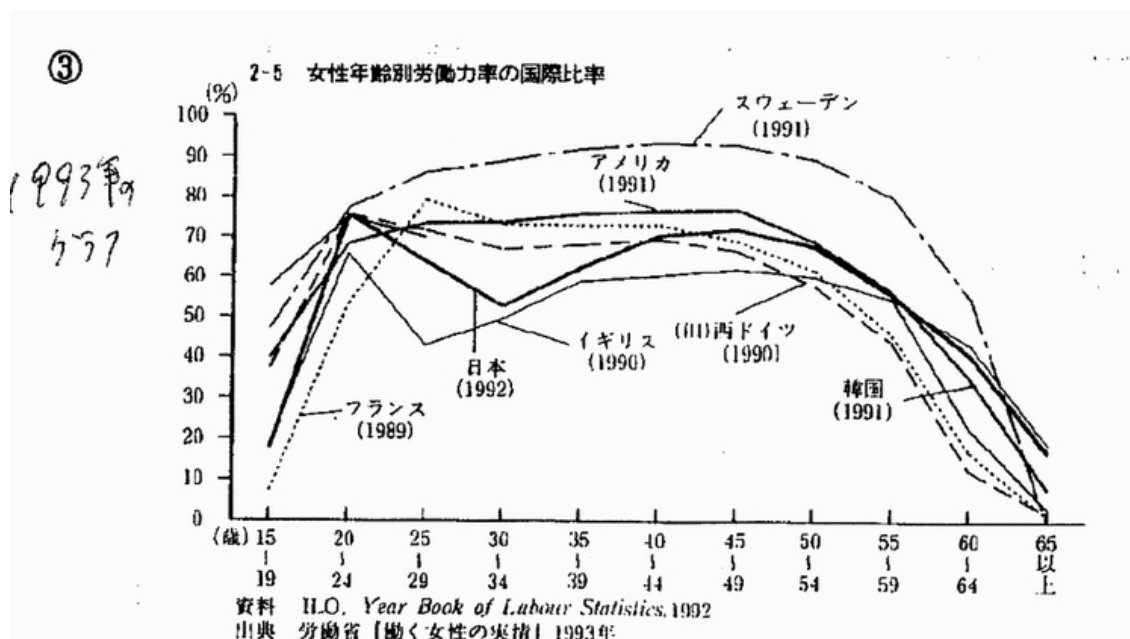
それで一番上の線はスウェーデンですが、全然中窪みになっていないんです。これは完全に子どもを持っても、女性が職業を捨てないということを物語っています。そういう社会的なシステムがあるからこそ、日本みたいに中窪みにならない、でこのほかの国も、日本のように中窪みにならない。で私の調査不足なんです、イギリスがなんでこんなに中窪みなのか、ちょっと分からないので申し訳ありません。他のフランスとか、ドイツとかアメリカもスウェーデンもみんな子育て期の女性も、職業を捨てないという形がはっきり分かります。



もうひとつ、最後にフランスのことを、申し上げます。これはフランスの出生率の推移のグラフです。フランスという国は、80年代からずっと、少子化になってきて、それがですね、さらに94年にガクッと来たんです。それでもの凄く慌てまして、恋をしなればいけないというので、政府が手を打ったわけです。そうしましたら、94年には、1.6人と1.7人の間であったものが、95年にてこ入れをしたら、たちどころに上がってきて、2006年には2.0人をすぎました。でたったの6年で見事に持ち直した。

これは色々な形のでこ入れがあって、時間がないので、細かくは申し上げられないのですが、てこ入れの多様性と熱心さというものは、びっくりする位のものがありました。ちょっと保育所を増設するとか、だけのことじゃないのです。もうありとあらゆる細かいところで、てこ入れをして、現場にいる人たち、例えば、保育所の先生とか、そういう人たちをいっぱい集めて、色々な団体、色々な個人も集めて、会議をして、現実に出てきた問題を解決するために、すぐに手を打ったんです。これを見て私は、嗚呼フランスはもう民主主義の国だなあ、民が求めているものをお上が吸い上げて、自分たちで、手を打とうという風になっている国なんだなあ、と思いました。それに反して日本のことを思うと段々絶望的になってきますから、この辺で止めておきますけれども、日本も少子化少子化と嘆

いているくせにやっていることのいい加減さ、それから画一的な対策、ちょっとびっくりする位、ホントにやる気があるのと、感じになってきます。



今日、世田谷区の方々とこういう企画を立てていただいて、素晴らしいと思いますけれども、こういう催しが全国各地で、行われてその結果を、衆議院の方も来ていらっしゃいますから、政策に反映していただいて、具体的に、こういう風にしなきゃダメですよ。今こういう風になっていますよ、と言う風に、現場の方々が発信してくださって、少子化問題の解決の方向に向かって国が舵を切っていただければよいと思います。

日本人は元来子どもを大切にする国なのですね。その結果、子どもが変になっているんでね。情けない状況なんですけど、本当の意味で正しい子育てを軌道に乗せて、お母さんも子どもも、幸福に生きられる社会になって欲しいと思います。これで終わります。了（採録 佐藤弘弥）